

学生海外調査研究	
中国の大学における日本語会話教育に対する捉え方についての考察 -日本語教師への半構造化インタビューを通して-	
氏名	秦 松梅 比較社会文化学専攻
期間	2015 年 8 月 7 日～2015 年 8 月 16 日
場所	中国・大連
施設	大連市内某大学

内容報告

1. 海外調査研究の背景

中国の大学における専攻日本語教育の養成目標は、「しっかりとした基礎、高い言葉の運用能力及び比較的高い理論水準を有する、質の高い複合型の高級日本語人材を養成するところにある」（段・陳・崎原・劉 2013:83）。この目標を達成するため、会話授業の目標は、仕事や日常における実際のコミュニケーションにすぐに役立つような日本語力を身につけることとされている（『高等院校日語專業基礎階段教学大綱』2001）。このような教育目標の具現化を目指して、教科書や教材開発も急ピッチで進められてきた（曹 2014）。日本語教師に対する要求も高まり、資質、実践能力や異文化に対する能力などが強く求められる。日本語教師は持っている「知識」を中心に学習者に「教えること」と受け止めている。しかしながら、このようないわば上からの教育改革、教科書や教材開発の改革はなかなか末端の現場には届きにくいという問題もある。教師たちは、目標をコミュニケーション重視としながら、実際の教室活動では、教師コントロールの強い文型練習や自由度の少ないロールプレイが中心となっている（長坂・木下 2011）。

教育改革や授業改善は一方的に学習者側だけを見ていては達成できない。授業の参加者は教師と学習者であることを忘れてはならない。教師と学習者の当該授業に対する意識が一致していれば、授業は良い方向に進められるが、教師と学習者の間には視点の異なりが存在し、無視できないギャップがあるという（Block1994、Nunan1995）。学習者側のビリーフでは、秦（2015）がある。秦（2015）は中国の大学における日本語専攻の学習者の日本語会話授業の問題点に対する捉え方を明らかにすることで、会話教育の改善に向けての示唆を得ることを目的とした。中国黒龍江省の4つの日本語専攻課程を設置している大学において調査を行い、半構造化インタビューデータを基に、KJ法で課題を分析した。その結果、現行の会話授業の問題点の核心は『収穫の少ない会話授業』であることが分かった。この問題の原因は「教師の教え方」と自らの「消極的な授業参加態度」にある。さらに、その背後には「中国の教育システム」、「社会からのプレッシャー」とそれらに対する自らの「心理的な葛藤」があるとして、会話授業の問題点を構造的にかつ自己を内省して捉えている。今後、会話授業の改善に向けては、学習者の主体的な参加を導くようなデザイン及び取り上げる内容を重視し、思考を深め、真正性がある双方向的な活動を導入する必要性のあることが示唆した。

山田（2014）は、「教師の現在の位置を多面的かつ的確に理解する研究の進化が求められている（p32）。Shavelson and stern（1981）が「教師が何をするかは、彼らが何を考えているかに統制され、その教師の belief が意思決定のフィルターとなる」。そこで、日本語専攻会話授業のクラスに担当した教師の belief はどんなものであるかについて調べる必要があると考えられる。授業をデザインするに当たって、教師は、会話授業についてどのように捉えているか、教師の考えを把握することが重要であると言える。換言すれば、教育改革や授業改善に向けて提案するためには、教室の運営者である教師の声を把握することも不可欠である。

2. 本調査研究が博士論文に置ける位置付け

今回の調査研究は申請者の博士論文の位置における第5章の研究1のところに当たる。中国の大学における会話教育に対して新たな提案を提起するために非常に重要な調査であり、今後の会話活動の

実践においてのデザインや教案の準備と強く繋がっていくと考えられる。また、博士論文執筆の展開において、大きな意義を持ち、申請者の一連の研究結果と実際の教育現場での指導に結びつく重要な一環になる。さらに、中国での日本語会話教育の構築への示唆を得ることが期待できると考えられる。

本報告者の博士論文では、言語生態学¹を理論として中国の大学日本語教育における会話授業のモデルを提案することを目的とし、以下の五つの研究を行う予定である。

研究 1 は日本語会話授業の問題点に対する捉え方を探る。

研究 1-1 の題目は日本語会話授業の問題点に対する捉え方—中国の大学における日本語専攻の学習者の場合—

「要旨」本研究は中国の大学における日本語専攻の学習者の日本語会話授業の問題点に対する捉え方を明らかにすることで、会話教育の改善に向けての示唆を得ることを目的とする。中国黒龍江省の4つの日本語専攻課程を設置している大学において調査を行い、半構造化インタビューデータを基に、KJ 法で課題を分析した。その結果、現行の会話授業の問題点の核心は『収穫の少ない会話授業』であることが分かった。この問題の原因は「教師の教え方」と自らの「消極的な授業参加態度」にある。さらに、その背後には「中国の教育システム」、「社会からのプレッシャー」とそれらに対する自らの「心理的な葛藤」があるとして、会話授業の問題点を構造的にかつ自己を内省して捉えている。今後、会話授業の改善に向けては、学習者の主体的な参加を導くようなデザイン及び取り上げる内容を重視し、思考を深め、真正性がある双方向的な活動を導入する必要性のあることが示唆された。この論文は『日本語教育』161号に査読付きで採用された。

研究 1-2 の題目（暫定）は、中国の大学における日本語会話教育に対する捉え方についての考察—日本語教師への半構造化インタビューを通して—（データの収集済）

研究 2 は当事者の評価を大切に、新たな会話授業のデザインに対して中国人日本語学習者を対象者としての調査である。

研究 2-1 の題目は、中国人学習者は事前課題と日本語母語話者の参加を取り入れたグループワークによる内容重視の会話授業をどう受け止めたか—中国の大学における日本語専攻クラスの場合—としている。

「要旨」中国の大学における会話授業の改善を目指して、日本語専攻会話授業に事前課題と日本語母語話者の参加を導入したグループワークによる内容重視の会話授業の実践を行った。そこからデータを収集し、学習者が今回の新たなデザインに対してどのような受け止めに形成しているかを検討することで、会話教育のあり方について提言することを目的とする。学習者の受け止めは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを援用して探った。分析の結果、学習者はこれまで受けてきた会話授業と対照しながら、今回の会話授業に対する肯定的な評価をしていたことが分かった。この論文は『言語文化と日本語教育』44号に査読付きで採用された。

研究 2-2 の題目は、内容上の事前準備は会話参加をどのように促し支えるか—中国の日本語専攻大学生を対象とした会話活動におけるやりとり分析から—としている。

「要旨」岡崎（1994）の内容重視の日本語教育に基づき、中国の大学で主専攻として日本語を学ぶ大学3年生を対象に、事前準備を取り入れた内容重視の会話教育を試みた。その目的は、内容重視の会話活動のあり方を探ることである。インタビューを通して、この授業に対して参加者から肯定的な評価が得られている。本研究では肯定的な評価が授業中のどのようなやり取りから裏づけられるのか、教室談話分析の手法を援用して質的に分析した。分析の結果、参加者が既有知識にアクセスしながら日本語で話す内容を深く考えていたこと、言語が考えた内容を伝える媒介となっていたこと、自信を持って概念化を行っていたことに加え、仲間と一緒に食品の問題は社会の風潮の乱れという要因と関連付ける試みを行っていたことがわかった。さらに、日本語でうまく言語化・発音化できない場合、母語を活用したり、仲間の助けを得たりすることによって困難を乗り越える様子が見られた。この結果を踏まえ、会話活動のあり方として内容を重視すること、それを助けるための母語による事前準備が必要であることが示唆された。『人間文化創成科学論叢』第16巻に査読付きで採用された。

研究 3 は中国における生態学的リテラシーの育成をめぐる内容重視の日本語会話教育の可能性を研究する予定である。

研究 3 の題目は（暫定）、中国の大学における日本語専攻クラスを内容重視の会話語教育に導入する可能性—卒業2年後、参加者に半構造化インタビューを通して—としている。（執筆中）

最後に研究 1 から研究 3 までの結果を博士論文にまとめ、その結果から得た知見から生態学的リテラシーの育成をめぐる内容重視の日本語会話教育のデザインへの提起をする予定である。これらの研究は博士論文の研究結果と実際の教育現場での指導に結びつける一助になると考える。なお、研究 1 の 1-1, 1-2 と研究 3 は「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムの支援を受け、研究調査ができたことに感謝しており、調査にご理解とご協力を頂いた3名

の対象者にも、感謝の限りである。また、いつも心強い励ましと研究への道筋を立ててくださる指導教官に心より感謝申し上げたい。

3・先行研究

Numan (1995) の理論的研究、そして Block (1994) の実証的研究によると、学習者と教師の間には無視できないギャップが存在し、教師の視点と学習者の視点から、同一の授業であっても違いが存在している。本研究は学習者の受け止め方と教師の会話指導の捉え方に関する研究を先行研究として詳しく見ていく。

岡崎他 (1999) はアシスタント英語教師という社会人としての性格を強く持った学習者に焦点に当て、学習者の視点から「分かる授業とは何か」、「満足する授業とは何か」、そして「分かる授業は満足するか」の三点を明らかにするために、15回で完結する中級日本語コースの全授業を対象に各授業終了後学習者に質問紙調査を行った。その結果、「分かる授業」とは教師の発話の速度が適切な授業であり、「満足する授業」とは、言語運用中心で学習者同士の対面による活動の多い授業であることが分かった。また、「分かる授業」が必ずしも「満足する授業」ではないことが示された。この研究から、学習者は言語運用中心で学習者同士の対面による活動時間が量的に多くなければなるほど、その授業を効果的と評価する程度も高くなる。学習者同士の対面活動の時間の量は「分かる」とは関係せず、ロールプレイやグループワークなどが多くても少なくとも学習者の理解には影響を与えない。つまり、言語運用中心で学習者同士の対面による活動であれば、学習者は特に活動の形式に拘っていないことが考えられる。

一方、長坂・木田 (2011) は非母語話者日本語教師研修における、教授法授業の会話指導の内容を再考することを目的に、中・上級学習者を指導する中国の大学で日本語教育に携わる中国人日本語教師 85 名を対象に、教育の現場において中・上級レベルの学習者の会話力向上を目的にどのような教室活動が行われているのかを無記名の質問紙調査（選択・自由記述）を実施した。その結果は、所属機関において、中・上級学習者を対象に、会話力向上を目的とした授業が行われていて、多くは日本人教師であることが分かる。教師にとって会話授業において仕事や日常での実際のコミュニケーションにすぐに役立つような日本語力を身に付けることが目標となっており、実用性への志向が強いことである。また、中・上級学習者を対象にした授業で、会話力に関わる活動をどのくらい行っているのか尋ねた結果、学習者の発話の自由度の低い暗記、音読み、翻訳、リピート、シャドーイングなどが上位を占めていることが分かった。つまり、自由度が高い活動は頻繁に教室では行っていないことが分かった。この結果から中国の大学の会話教育は実際のコミュニケーションにすぐに役立つような日本語力を身に付けることを目標にしているが、学習者にとって自由度が高い教室活動はまだ取り入れられてなく、学習者主体の会話活動も行っていないことが窺える。

山田 (2014) は、「1990 年代から起こった教師教育のパラダイムシフトの流れにおいては、教師見習い型からトレーニング型への変遷が促され、現在では、自己研修型教師が主流となっている。正解がない中で教師がいかにして自分の思考を形とし、行動を省み、自分自身を客観的に把握できるかが成長のための重要な要素となる (p32)」。教師を客観的に把握できるため、Horwitz (1985,1987) による BALLI (Beliefs About Language Learning Inventory) が使われたが、質問紙の限界があるため、質問項目以外の方法も考えられるようになった。また、Sakui and Gaies (1999) が指摘したように、学習者は質問紙の項目を異なって解釈することもあるし、質問項目以外の belief についても言及したためインタビューなどの質的調査も必要だとの報告がされている。

そこで、本研究では、会話授業の改善策を提案する前に、会話授業に対する教師の声を探ることにする。教師は会話授業を運営する時、会話授業に対してどのように捉えているか、特に会話授業の問題点に着目して半構造化インタビューを通して教師の意識を質的に分析する。

4・研究目的・課題

本研究は会話授業について教師の捉え方を明らかにすることで、会話活動の問題点を多角的に捉え、中国での日本語会話教育への示唆を得ることを目指すことにする。研究課題は以下のように設定している。

研究課題：中国の大学における会話授業に対して日本語専攻クラスの教師はどのように捉えているか

5・研究方法

5・1 フィールドの概要

今回の海外調査研究において 2015 年 8 月 7 日（金曜日）から 2014 年 8 月 16 日（日曜日）に渡り、大連市内某大学における 3 名の日本語専攻クラスを担当した教師に中国語による半構造インタビューを通してデータの収集を行った。1 人につき、30 分から 40 分程度で普段使用している馴染みのある教室で実施した。教師の同意を得た上で録音をし、録音の文字化資料を全て分析資料とした。なお、インタビューする前に録音について対象者の了承を得た。

5・2 半構造化インタビューの内容

表 1 半構造化インタビューの内容

番号	項目
1	一週間当たりに担当している授業のコマ数を教えていただけますか、また、現在使用している教材は何でしょうか。
2	会話授業でどのような目標を持っていますか。その目標を達成するために、どのような工夫をしていますか。また、その困難点がありますか。
3	会話授業はどのように行っていますか。よく取り入れる内容（トピック）は何でしょうか。何故その内容を選ばれましたか。
4	今後の会話授業はどのように行う予定でしょうか。今後の会話の授業について、先生はどのようにお考えでしょうか。

5・3 分析方法

本研究は、日本語会話教育担当した教師が現行の会話授業の問題点をどう捉えているかを見ることを目的としている。竹内他（2012）によると、KJ 法は、質的データから仮説を生成したり、今まで把握できなかった学習者の実態を詳細に記述したり、あるいは学習上やクラスの運営上の問題点やその解決策を発見したりすることを目指す場合有効な方法である。また、KJ 法は蓄積された情報から必要なものを取り出して、関連するものをつなぎ合わせて整理し、統合する方法の一つである。本研究は、日本語会話授業を担当した経験がある教師が考える現行の会話授業の問題点についての仮説を生成することを課題として、インタビューデータを基に川喜田（1986）の KJ 法を用いて質的に分析する予定である。

6・まとめ

本調査は、平成 27 年度の「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムの支援により得られたデータは、現在まで収集した資料やデータなどを加え、2016 年の国際学術大会で発表し、その後、日本国内の学術誌に投稿する予定である。査読論文の形で公表するとともに、現在執筆中の博士論文の一部として組み入れ、本海外調査研究の成果とする予定である。

注

1. 言語生態学は、構造言語学や機能主義言語学などが言語を人間活動から分離し、いわば孤立した実体として捉えるのとは異なり、言語活動を人間活動と一体のものとして捉えようとする言語学である。言語整体学では、人の生き方の良さと言語のあり方の良さを表裏一体の関係・相互交渉関係にあるものとする。また、人の生き方、言語のあり方に不全があれば、それを保全することも生態学の目的とする（岡崎 2013）。

参考文献

- 岡崎眸（1994）「内容重視の日本語教育－大学読解教室の場合－」『東京外国語大学外国語学部論集』第 49 号、227-244。
 岡崎眸（1999）「第 10 章学習者と教師の持つ言語学習についての確信」、宮崎里司、J.V. ネウストブニー編『日本補教育と日本語学習－学習ストラテジー論にむけて』くろしお出版、147-160。
 岡崎眸（2013）「持続可能性日本語教育－言語教育への生態学的アプローチ－学士課程教育における意義－」日本言

- 語文化研究会論集第9号、(<http://www3.grips.ac.jp/~jlc/jlc/essay.html>) .
- 川喜田二郎 (1986) 『KJ 法－混沌をして語らしめる』 中央公論社
- 秦松梅 (2015) 「日本語会話授業の問題点に対する捉え方－中国の大学における日本語専攻の学習者の場合－」 『日本語教育学会』 第161号, 15-30.
- 曹大峰 (2014) 「中国における日本語教育研究の組織化と今後の展開」 国際シンポジウム当アジアにおける日本語教育の現状と今後の展開
<<http://www.nkg.or.jp/kenkyu/2014/NKG140904kokusaiSymposiumEastAsia.pdf#search='国際シンポジウム 東アジアにおける日本語教育の現状と今後の展開'>>
- 段克勤・陳詠梅・崎原麗霞・劉笑非 (2013) 「中国の大学における日本語教育の変化－日本文化の導入－」 『鳥取大学教育研究論集』 3号, 83-88.
- 竹内理・水本篤 (2012) 『外国語教育研究ハンドブック－研究手法のより良い理解のため－』 松柏社
- 教育部高等学校外語專業教學指導委員會日語組(編) (2001) 『高等院校日語專業基礎階段教學大綱』 大連理工大学出版社
- 山田智久 (2014) 「教師のビリーフの変化要因についての考察－二名の日本語教師への PAC 分析調査結果の比較から－」 日本語教育 157号, 32-46
- Block, D. (1994) *A day in the life of a class: teacher/learner perceptions of task purpose in conflict*. System vol.22, 473-86.
- Nunan, D. (1995) *Closing the gap between learning and instruction*. TESOL QUARTERLY, vol.29, 133-58.
- Horwitz, E.K. (1985) *Using student beliefs about language learning and teaching in the foreign language methods course*. Foreign Language Annals, 18(4), 333-340.
- Horwitz, E.K. (1987) *Surveying student beliefs about language learning*. In A. Wenden & J. Rubin (Eds.), *Learner Strategies in Language Learning*. Cambridge: Prentice-Hall, 119-129.
- Sakui, K. and Gaies, S.J. (1999) *Investigating Japanese Learners' belief about language learning*. System, 27, 473-492.

秦 松梅

しんしょうばい／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科研究科 比較社会文化専攻

指導教員によるコメント

秦松梅さんは、修士課程から博士後期課程の現在に至るまで、一貫して、言語生態学を理論的背景として中国の大学での日本語教育における会話授業のモデルを提案することを目的とした研究を行っています。秦さんの研究の特色は、これまでの中国会話授業に関する多くの研究が量的調査をもとにした研究であったのに対して、言語生態学という理論的背景に基づき質的調査を行っている点、中国の大学における会話授業の改善という学習者・教師の両側に対する調査を通して会話授業のあり方を提案することを目標にしている点にあります。

博士論文は三つの研究から構成される予定で、今回貴プログラムの助成をいただき研究1-2で使用する予定のデータを収集することができました。中国の大学における会話授業に対して日本語専攻クラスの教師はどのように捉えているかについて半構造化インタビューによって問うものです。現在は収集したデータを分析し投稿論文にするための準備を行っているところです。

今回の秦さんの調査は、博士論文の一つの柱を構成する論文の重要なデータを収集できた点、実際のコミュニケーション場面で役に立つ日本語指導への貢献が期待される点で高く評価されるものと考えます。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻 佐々木泰子)

The Conversation Education of Japanese major class in China –From the standpoint of Japanese Major Teachers –

Qin Songmei

This reporter has received the funding of “Student Overseas Visits Project” from the “International Research Program for the Advancement of Women in Leadership” program

Through this research, I can clarify the actual condition of the Japanese major conversation activities clearly in the universities. By examining the data collected from the teachers, I would like to provide the recommendations for conversation classes. I have collected a lot of important information concerning the region of my research. And these data will be summarized and analyzed in a statistical way in order to obtain scientific and significant results.